

・組版、エディトリアルデザイン的な基礎知識も説明	
・読者はIllustratorとPhotoshopはそこそこ使える(触ったことぐらいはある)人を想定	
・InDesignはIllustratorとは用途が違う。量産ツールであることを意識した構成に。「あなたそれ、数百ページにわたって設定できますか？」	
・機能が多すぎるので、体系化して説明する。「全体設定→細部設定」「自動機能→手動機能」	
例えば、字間の開きすぎや送り・追い出しを調整したいなら、まずは 文字組みアキ量設定・禁則設定・ぶら下げ設定→欧文泣き別れやハイフネーション→分割禁止→最後にカーニングや字詰め。	
・まだまだ現役のCS6も視野に入れ、新機能より主要機能を中心として解説	
・主要判型のフォーマットサンプルを付ける	

章	節	備考	
1章	InDesignで本を作るために	最初にInDesignとはどんなツールなのか、作業の流れを説明します。	
	InDesignは量産のためのツール	InDesignは複数ページが編集できるIllustrator.....ではない。Illustratorとは考え方・用途が違う。作るツールというよりは、集めて配置するツール。 デザイナーとオペレーターが基本分かれているのも大きい。 200ページぐらいのものを作るために設計されている。「それ、数百ページにわたって設定できますか？」という問いかけを常に忘れずに。	
	InDesignのドキュメントの構造を知っておこう	先にドキュメント構造から。マスターページ、ページ、レイヤー、フレーム枠、オブジェクトスタイル、段落スタイル、文字スタイル、部分書式etc。	
	InDesignを取り巻くさまざまなデータ	フォント(Type1、TrueType、OTFなど)、画像(PSD、AI、EPSなど)、書き出し形式(印刷、PDF、JPEG、IDML)、ライブラリやブック(Indl、indb)など。さまざまな形式。可能ならバージョンごとの互換性についても触れる。 ※CC2014からidml書き出しを使わずに過去バージョンで開ける機能が追加された	
	InDesignの画面構成	パネルの操作方法、UIレイアウトの調整と保存	
	デザインから入稿までの流れ	紙面デザイン、原稿制作、フォーマット作成、組版、校正、入稿データ作成。ネイティブデータ入稿とPDF入稿についても軽く触れたい。	
2章	マスターページを作る	版面、ノンブルなどを設定した、シンプルなドキュメントを作成し、テキストを流し込むところまで進めま す。	最初のサンプルはA5横書き(ビジネス書のイメージ)
	書籍の構成要素を知ろう	判型、版面、ノドと小口(マージン)、ノンブル、柱、ツメ、開き方向、横書き・縦書き、裁ち落としなどを解説。この章で作成するサンプルも見せる。	
	紙面デザインを設計しよう	文字中心の本のような地取り行取りタイプと、雑誌的なフリーレイアウトタイプでは設計が違う。前者の場合は基本文字サイズ、文字数・行数を意識して設計するとキレイに組めます。後者の場合はマージン決める程度でシンプルに。 とりあえず、扉と本文、柱、ノンブルのみのシンプルな作りで設計。	
	ドキュメントを新規作成する	紙面デザインを「ちゃんと」理解して、各値を設定していく。InDesignのドキュメント設定には、マージン方式とレイアウトグリッド方式の2種類がある(一応ベースライングリッドもあるが欧文向け)。マージン方式のほうが単純で応用が利きやすい(ここではマージン方式?)	
	マスターページとは	マスターページの構造から説明。マスターページに何でも置く派(組み見本にしてしまう)と、最低限しか置かない派がある。	
	マスターページを編集する	マスターページに切り換えて、ノンブルや柱を設定する。	
	マスターページにテキストフレームを配置する	ノンブルや柱の設定のために、テキストフレームを作るツールや、フォント、文字サイズ、カラー設定などを説明。ここでの説明はザックリしたものにして、後から細かく説明。数値での配置は先にやってもいいかも。	
	ズームとハンドツール	どこかに混ぜてもいいかも。	
	テキストを流し込む	テキストの配置の説明。テキストはサンプルとして用意。テキストフレームの説明が少しほしい(詳しくは次の章で)。	
	ページパネルの利用	ページ移動、入れ替え、削除など。com+Jでページ移動できる話もコラムで。	
	マスターページのマージンを調整する	ドキュメントを作ってしまった後でマージンを調整する方法を説明(作成後に行数・文字数を減らすなど、よくある話なので.....)。後からマージンをいじったばあい、配置済みのフレームはどうなる?という話も。	
	マスターページを追加する	扉ページ用のマスターを作る話。マスターの継承。再適用も。	
	ドキュメントを保存する・開く	落ちたときのバックアップファイルの話もしたい。復帰の話。取り直し・やり直しもこの辺に突っ込んでおく。	
	ドキュメントを印刷する	全部を説明しなくてもいいが、用紙サイズを選択、見開き印刷、トンボ付き印刷、ページ範囲の指定方法あたりの説明はしておきたい。ちゃんと最新のプリンタドライバをインストールしておき、プリンタ定義ファイルを選択しておく。	

3章	テキストの書式を設定する	2章のサンプルを引き続き使い、見出しや本文のスタイルを設定していく。	サンプルは継続				
	スタイルは使い分けが重要	テキストフレームとフレームグリッドで設定の流れは少し違うが、「段落スタイル→文字スタイル→個別の書式」の順で設定することがとても重要。InDesignではマルチスタイルができない。段落全体の書式と、部分の書式の違いを認識する。					
	テキストフレームとフレームグリッドの違い	テキストフレームに字取り・行取り設定が追加されたものがフレームグリッド。設定ダイアログと設定結果を見開きで比べ、それぞれの特徴を解説。この章全体ではまずはシンプルなテキストフレームの話をし、その後フレームグリッドを説明する。テキストフレームでもちゃんと計算すれば字取り行取りになりますよ。					
	本文用の段落スタイルを作成する	フォント、フォントサイズ、行送りの3つを設定。ダイアログメインで説明するか、ツールで直接設定したものを段落スタイルに反映させるか、どちらを中心にすべきか検討中。節の分割も検討(書式設定とスタイルの話で)。行送りは数値指定と自動があり、自動の場合は内容に合わせて広がる。また、行送りは文字単位での指定という点にも触れておきたい(一部の文字だけ選択して設定するとうまくいかないことが)。					
	見出し用の段落スタイルを設定する	フォントサイズやフォントの変更だけでなく本文と同じなので、段落間スペースの設定や、メトリクスやオブティカルでツメ組みし、ページ末に見出しが来ないように調整する方法を説明する。見出しを個別に手作業でツメ組みするのは基本ムリ。スタイルの継承についても触れる。					
	強調部分のための文字スタイルを作成する	文字スタイルの設定。文字を選択した状態で作成するとその設定が引き継がれる。					
	文字組みアキ量設定で文字組みをキレイにする	難しい話だけど、早めにやったほうがいいことなので。出力を見て、約物の空きはキレイか、和欧文間は問題ないか、欧文の詰まり具合はどうかなどを確認。幅が狭くても字詰めがキレイかどうかも確認すべき。よくありがちなのが、約物の配置がバラバラ、欧文の字間がほとんど開かない設定にしたために和文が空きすぎてしまうパターン。この設定がデフォルトのままだと、別バージョンのInDesignに持っていったときにエラーが起きることがあるらしい。コンポーザーの話はコラムなどで(印刷所以外はそれほど重要ではないので)					
	泣き別れと字間の開きをチェックする	泣き別れ(単語が行をまたぐこと)関連の各種設定。1つめは禁則設定、2つめはぶら下げ設定、3つめは欧文を強制的に分ける欧文泣き別れとハイフネーション、4つめは泣き別れを強制的に避ける分割禁止、5つめはカーニングや字詰め。なるべく全体を自動調整できる機能を先に使用し、どうしてもダメなところだけ手で調整するのがInDesignの正しい使い方(それ、数百ページにわたって設定できますか?という問いかけが重要)。					
	インデント	ブラ下げと字下げの設定方法(「ここまでインデント」もコラムなどで説明)					
	箇条書き	連番の振り替え方					
	タブとリーダー	タブやリーダーを組み合わせて簡易的な表を作る。					
	文字パネルとコントロールバーによる書式設定	サンプルから外れてもいいので一通り紹介					
	改ページ	改ページは重要だが節を立てるほどでもない?					
	フレームグリッドを使用する	テキストフレームをフレームグリッドに変更し、どういう設定ができるのかを説明。フレームグリッド自体が書式設定を持つ点と、字数・行数でしかサイズ指定できなくなる点が最大の特徴。コピー&ペーストするときに影響が出るという副作用もある。グリッド揃えについても触れておきたい。 ※スタイルダイアログの説明を本文中ですべてやるのはムリなので、付録に一覧で入れることを検討する。					
4章	画像を配置する	画像関連とアンカー、回り込みの話を一通り解説	サンプルは継続?				
	InDesignに配置できる画像の特徴	主にEPS、PSD、AI。ビットマップは解像度によって配置サイズが変わる。AIの場合もアートボードで仕上がりサイズを意識して作図するときれいに配置できる(重要)。EPSとPSDの特徴と使い分け。EPSは制限も多いがPSDよりファイルサイズを小さくできる。InDesign自体の作図機能とAI配置の特徴と使い分け。					
	画像を配置する	グラフィックフレームの挙動。複数をまとめて配置することも可能(コラムでも可)。					
	画像のトリミングと拡大/縮小	選択ツールとダイレクト選択ツールの使い分け。トリミングの理屈。Illustratorでいえばクリッピングパスが常に掛かった状態。フレームに合わせる操作など。					
	画像の切り抜き	枠の編集、クリッピングパスも解説					
	文字の回り込み						
	インラインとアンカーの原理を理解しよう	インラインは文字と同じ扱い。アンカーはテキスト中に碇をおいて、画像自体は自由な位置に動かせる。インラインで配置することのメリット(使い方次第で修正が大幅に楽になる)。					

		インラインの使い方と注意点	インラインのほうがアンカーより使いやすい。文章中に画像を入れる例(上下の空きは段落間スペースで調整)、テキスト中にアイコンを入れる例、凝った飾りの見出し行を入れる例など。行送りを「自動」にしないと画像が他の行に重なることがある。また、フレームグリッド内にインライン画像を入れるときは色々と注意が必要。						
		アンカーによるオブジェクト配置を設定する	アンカーの解説。回り込まなくなるので、文字の回り込み設定と組み合わせる(ただし、アンカーがある先頭行の文字が避けてくれない仕様)						
		リンクパネルで画像を管理する	重要。画像の解像度もわかる。						
		画像の自動サイズ調整							
		画像の詳細表示と簡易表示	簡易にすると速度速くなる						
5章	フレームの編集とカラー設定		カラー設定、作図機能、レイヤー、オブジェクトスタイルなどフリーレイアウトで役立つ話	B5	変	ぐ	ら	い	の
		InDesignのフレームの表現力	概要。Illustratorを使わなくても、InDesignのフレーム自体の表現力もそれなりにある。アイコンなどを作成することもできれば、テキストを取めたコラム枠などを作ることできる。						
		スウォッチとカラー設定	基本スウォッチでやろう。イラレのグローバルスウォッチに相当。カラーパネルは使わないで済むなら使わないほうがいい。濃淡とか個別に変えると悲惨なことに。濃淡だけのスウォッチも作れるので。						
		フレームにカラーを設定する	スウォッチの適用						
		角丸設定	これはよく使うので。						
		パスの編集	ペンツール。パスファインダなども軽く。						
		線の設定	線種や矢印の設定						
		フレームの移動・複製・整列	整列パネル。スマートガイドの話もやりたい(これも使う派、使わない派がある)。						
		リキッドレイアウト	レイアウトを自動調整する機能						
		フレームのグループ化	例としてはテキストフレームと画像を読み込んだ部品を組み合わせた節タイトルが実践的。グループ化後にダブルクリックで編集モードに入れる話も重要。CC2014では「元のレイヤーに戻してグループ解除」ができる						
		テキストフレームの設定	3章では単にテキスト配置の透明な枠的な扱いだったので、ここではコラム枠やキャプション枠を作るために使えることを説明。フレームのマージン。テキストに合わせて自動調整できる。枠あわせをショートカットキー登録しておくとう便利						
		グラデーションの設定							
		エフェクト	主にドロップシャドウ						
		オブジェクトスタイルの利用	設定したくない項目はオフするのが超重要。忘れると大変なことになる場合も						
		レイヤーの利用	IllustratorやPhotoshopと同じ。ただし作りすぎに注意。デザイナーとオペレーターが別人なので多すぎるとかえって混乱の元。						
		ライブラリの利用	パーツが複雑なフォーマットを扱うときは欠かせない。割り付け機能重要 CC2015以降ではCreative Cloudでチーム共有できるようになったとのこと。						
		コンテンツの収集ツール	ライブラリに似た用途の機能						
		章末コラム: フレームをなるべく減らす	※背景を塗る程度なら、段落罫線を使うなど色々な裏技もある。フレームは少ないほど吉						
6章	段組みと縦組みの文書を作る		ここから応用的な話に						
		段組み設定							
		段抜き							
		段分割	段落スタイルとの関係が謎						
		縦組みのドキュメント設定							
		フレーム単位での縦組み設定							
		縦中横や文字回転							
7章	表組みをマスターする			表	は	よ	く	あ	る
		表の構造	罫線とセルの集まり。段落内に配置され、インライン画像のように扱える。スタイルは「表スタイル」「セルスタイル」の二重構造。表の場合はスタイルの話から始めなくてもいいかも						
		表を作成する	空の表を作る話と、テキストを表にする話も。CC2014からテキストフレーム外でも表が作れる(あまり重要な話ではない) Excelから読み込む話も						

	セルの書式と罫線を設定する	セルパネルと線パネルでの設定について	
	セルスタイルを作成する		
	表スタイルを作成する	表スタイルを作ると、一気に書式設定済みの表を作成できる。表の数が多い場合はマスト。	
	セルの結合／分割、行列の追加／削除	CCで表はD&Dでの編集が強化されているとのこと	
	表内に画像を配置	CC2015の新機能。あまり役に立たないようなら省いてもいい	
8章	目次と索引を作成する	みんなが嫌がる目次と索引を効率よく作ろう	少し凝った目次と索引のサンプル。流し込み一発で作れるもの
	目次・索引を効率よく作るコツ	目次はデザイン構造が複雑になりがちなのに、最後に慌てて作るもの。見栄えのよいものを手早く作るのがベター。 大見出しまでしか拾わないような項目が少ない目次は、先にテキスト抽出してデザイナーが作ってしまっただけのほうがいいかも。 中見出し、小見出しまで拾う複数ページの目次は、流し込みとスタイル設定だけで作れるよう最大限の工夫を。	
	ドキュメントをブックにまとめる	大抵は章単位でファイル分けしているのでそれをまとめて、ノンブルを振り直す	
	目次データを抽出する	自動更新を使うかどうかは要検討。同じページ内で順番が入れ替わることがあるので注意。	
	目次項目のスタイルを設定する	正規表現スタイルや行頭文字スタイルなどをフル活用	
	索引データを抽出する	索引の設定と抽出	
9章	いざというときに役立つ機能 & Tips	流れに入れにくい、もしくは流れに入れられないほうが目立つ	ケースバイケースで
	合成フォント	重要だが流れでやらないほうが目立つかと。フォントが増えまくらないよう注意	
	字形パネル	フォントの種類によって使えないものもある。	
	フォントの置換		
	さまざまな貼り付け方法	書式なしではり付け、フレームを無視して貼り付け、同じ位置に貼り付けなどひととおり	
	検索・置換		
	テキスト変数	超重要だが2章に入れるには早いし、それ以外の章では浮いている	
	段落罫線と段落背景	段落背景は少し前のCCの新機能だったはず	
	ルビと圏点		
	割り注、脚注	使ったことがない	
	画像の再リンク	リンク切れのチェック、フォルダの再リンクなど	
	特色設定	PSDやAIに特色が混ざっているとスウォッチが消せなくなる。普通かK+MやK+Cでデータを作成し、印刷時に置き換える。うっかり五版のデータとか作らないよう注意	
	別のドキュメントにページを移動する		
	ライブプリフライト	重いが便利	
	抜き、オーバープリント、トラッピング	印刷所によってはK100%のべた塗りは自動オーバープリントになる。K99で設定する	
	ファイルのパッケージ	CC2014ではパッケージにPDFとIDMLを同梱できる	
	InDesignを軽くするための環境設定	マシンの設定が低い場合。いいマシンを持っているならやらないほうがいいこともある。	
	環境設定周り	単位とかはよく使う	
	ショートカットキーの設定		
	付録		
	スタイルダイアログのパネル一覧		
	掲載しない予定の機能(説明していない機能の一覧があると親切)		
	epub書き出し、インタラクティブ いらなかと		
	XML関連	個人的にはよく使うが必須ではない	
	Adobe Stockマーケットプレイス	あってもいい気も少しする	
	Type Kit	これも迷いどころ	

QRコードのデータ結合の強化	データ結合					
カラーテーマツール	迷いどころ。					
お気に入りフォント						
代替レイアウト	便利そうではあるが					
ページツール	一部のページだけサイズや位置を変える機能(むしろ危険)					